

Title	重慶側史學界消息
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.2 (1941. 11) ,p.133(319)- 134(320)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19411100-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

重慶側史學界消息

國史館成立 昨年舉行された五中全會及六中全會の際、建設檔案總庫案・籌設國史館案前後して通過。由て張繼・朱希祖等その事に當り、今年^{昨民國廿九年}二月籌備委員會を重慶歌樂山に設け、先づ長編を起草し、他日筆削の資とすることとなつた。長編は略三期に分ち、一は辛亥革命より國府成立に至り、二は七七事變勃發まで、七七以後を第三期とする。革命前の史料は別に一編とする。

蒐集戰事資料 國立北平圖書館昆明辦事處は二年來西南聯合大學と合して中日戰事史料徵輯會を組織し、前者は採訪を、後者は整理を分擔し、入手所藏の史料既に二萬餘種に達した。由て同會では整理済の分を戰事史料集刊及び叢刊に別ち、陸續出版せんとしてゐる。この外西北聯合大學及び胡愈之・杜重遠・鄒韜奮の諸氏も亦此の種の工作に従事してゐる。

中央研究院歷史語言研究所近況 該所雲南移轉後その工作範圍は邊疆史地・中亞歷史・蒙古史・西藏史及び其言語・西南各種言語・西南民族・體質測量等に重點を置き、その出版事業は商務印書館と合作し、專書及び集刊に分つて刊行。既刊の專書は李光濤等編明清史料丁編十冊・董作賓著殷虛文字甲編等十餘種あり。又

中央研究院第一期評議會等五次年會を三月廿二日(民國二十九年)重慶に於て舉行。出席會員は翁文灝・王世杰朱・家驊・秉志・胡先驥・葉企孫・竺可楨等廿九人。居正・陳立夫も列席。同會に於て第二期評議員を選出したが、史學に胡適・陳寅恪・陳垣、考古學に李濟が選ばれた。

北平研究院史學研究所近況 該所は近來陝西省寶雞縣關鷄臺發掘資料(譯者註。出土品は現に北京故宮)を整理し出版を準備せる外、雲南邊陲民族史料の搜集と考證に従事中。本年(二十九年)四月同所と北平圖書館昆明辦事處との臨時合作辦法を成立せしめ、研究に利してゐる。

中央博物院工作近況 昨年吳金鼎氏を主任として雲南大理史前文化の發掘をなし、古墳十七座、古代遺跡十二ヶ處に及んだ。研究の結果大理の史前文化は五期を包括して居り、每期石器の變異は非常に少いが、土器は各次の如き特徴を具へてゐる。則ち第一期は紅砂質の土器で表面に壓紋があり、第二期は花紋が比較的頻繁に繰返されて居り、第三期は黑砂質の土器で、或は花紋のあるものもあり、第四期はまた紅砂質の土器でたゞ紅い表層があり、磨いた光澤あるもの。第五期は手づくねの繩文土器である。大理の史前文化と仰韶・龍山の二文化とを互に參照するに、石器のうち斧・鑿・鏃の三類と長方形の石刀とは何れも極めて類似してゐるが、たゞ大理所出の半月形石刀は華北に無いものである。土器の形式製法は仰韶の土器と殊に類似してゐるが、たゞ斷續せる壓紋あるものは華北では僅に甘肅より出土するのみである。今次發掘の結果は頗る中國古代南北文化の關係を證する佐けとなつた。

(燕京大學歷史學會「史學年報」第三期史學界消息整理による)
一九四〇十二月刊

(杉本 忠)

華北華中旅行日誌 (自二月十一日 至三月五日)

此文は在北京の杉本忠君より送られた私信の一部であり、「史學」に掲載するものではないとくれぐれも注意書のあつたものであるが、参考となる節が多いので印刷することにした。文責は編輯者にある。

二月十一日 午前十時三五分北京站發。午後一時五六分天津站着。塾員鈴木功・佐藤欣一兩氏の案内で鐘紡第六廠を訪ひ、足立廠長以下塾員橋山慶吉郎・林喜八郎氏等に面會。夜は天津三田會の歡迎晚餐會に出席。會長鄭梅雄氏は偶然にも筆者擔任學級學生の嚴父なること判明。尙翌日見學の打合をなし、鐘紡の來客や出張者用の宿泊所に御世話になる。設備よく下手なホテルより勝ること萬々である。

十二日 午前中より鐘紡鈴木氏、昨夜の三田會で知りあつた東邦洋行月村博光氏の案内にて、先づ天津特別市公署教育局に局長何慶元氏を訪ねる。同氏はやはり塾員で、當地の圖書館を視察したいと云ふ我々一行の爲に、教育局第三科長陳葆光氏をわざと案内として同行せしめられた。元來天津の圖書館はさして注目する程のものでもないが、昭和十四年八月東大和田教授一行が北支蒙疆・中支の主要都市に就て、今次事變による圖書の移動集散の狀況並に管理保存の狀態を視察された際にも、折からの洪水の爲

調査を省略され、濟南と共に調査報告 （一）雄・市古宙三共著「支那に於る文獻の現存狀態」東亞論叢第二輯所にも漏れてゐるので、此の機會に一見したいと志したのである。 陳氏は先づ吾々を天津市立第一圖書館に導かれ、館長姚金紳氏が親しく一行を案内せられたが、普通の邸宅を利用してゐる同館は、平家建の爲床上約四尺程水に浸り、未だにその痕を壁に止めてゐる有様で、現在閱覽を中止し整理中であつた。水害を被つたまゝ未だ修理を經ない漢籍は、一室に堆く積上げられてゐるが試に手に取ると各頁は糊で固めたかのやう、宛ら一枚の板の如く貼付いて、その修理の容易でないことを想像せしめた。火の氣のない書庫の寒氣は骨を刺すばかり、毛皮裏の中國服を纏つた姚館長はともかく、應接室で外套を脱いだまゝの吾々洋服連は頓え上つてしまひ、更めて氣候と服裝の適應性などを頭に浮べるのであつた。それより姚氏の部屋で藏書類その他に就て質問したが、吾々の前に持出された統計は古いもので、しかも一見してその不備が明かであつたので可及的速に新に調査して報告されることを約された。本報告の遅延した理由の一半はこの報告を待つたことにあるのである。それによると本圖書館の歴史は比較的新しく民國十七年天津特別市の設立に當り、市當局は圖書館建設の必要を感じ、十八年九月現館長姚氏を籌備處長に任命。十九年冬南開楊花園大街の住宅を購つて館舎となし、二十年六月二十日開館、市立圖書館と稱したが、二十七年四月市立第一圖書館と改名した由で、藏書總數は毀棄圖書を除き六七、〇〇一冊、でその内中國文書籍六〇、五四六冊、日語書籍五九九冊、洋書一、七九一冊、兒童書三、二三四冊、善本六五〇冊地方文獻一八一冊、他に雜誌三〇種。今次事